

200歳万歳!

200歳まで生きる会
平成21年1月・第32号

新年明けましておめでとうございます。昨年は、ご支援ご鞭撻をありがとうございました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

高齢者の時代になってきました。日本では、2008年の現在では65歳以上の高齢者数は、22.1%、2025年には27.28%にまで上昇すると予測されています。こうなると、3人に1人は高齢者になります。

病気になりやすいのは後期高齢者と言われる75歳〜80歳代までで、この時期を無事に過ごして90代に達した人には、驚くほど健康な人が多いのです。ボストン大学のパールズ教授も『健康な100歳老人の謎』の中で、その事実に触れ、年をとると心身の低下は避けようもないという、これまでの固定観念は考え直す必要があります。うだと主張しています。

そうなると、高齢者人口の多い世の中になっても、心身の衰えた老人ばかりにはならない可能性が十分あるのです。驚異の健康老人の時代が来るかもしれないのです。

「200歳まで生きる会」の目指すところは、まさにこの驚異の健康老人をたくさん育てることにあります。

今、世の中はそういう時代背景を元に、アンチエイジングの研究が花盛りです。

びっくりするような研究が相次いでいます。これまでまるで知らなかったような健康長寿のための新しい理論と実践方法が次々に世の中に出てきています。

知らないでいると、人は病気にかかったまま、自分を癒す方法を知らないで、あの世に急いでいくことになります。でも、新しい研究を知れば、知った時から自分の生き方、考え方を変えて、生活習慣を変えていけば、驚異の健康老人の仲間入りができるのです。今の時代は情報知価の時代と言われますが、よく言ったものです。人間は、必ずしも老化に向かって行くのではなく、若返っていくことが可能なのです。老化減速が研究の中心ではなくて、これからますます若返りの研究が中心になっていくことでしょう。ほんの少数の遺伝子が変わるだけで、そんなことが起きる可能性があるのです。現代でも、カヤ・クルプ（若返り科学）というものがあって、ヒマラヤに不老長寿の草が生えており、ソーマという秘薬の作り方が伝わっているというのです。それを飲むと、大変なことが起こります。最初は筋肉が衰弱し、皮膚で覆われた骸骨だけになってしまいますが、でも、ソーマの力によって生気は保たれ、今度はそこから筋肉が新しく、かつ猛烈に成長する兆候を見せ始め、新しい歯がダイアモンドや水晶のごとく澄んで現われるのです。

プロフィール

1929年生まれ。島根県出身。
教育学博士。心理学博士。US
アカデミー・アカデミシャン。
日本文化振興会副会長、日本サイ
科学会顧問。七田チャイルド
アカデミー校長。しちだ・教育
研究所会長。現在、七田式幼児
教育を実践している教室が全国
で約450教室を数え、アメリカ、
韓国、台湾、シンガポール、マ
レーシアにも七田式教育論が広
がっている。



200歳まで生きる会
会長 七田 眞

爪は伸び、髪の毛も新しく生え、皮膚はルビーのような柔らかい色あいを帯びてきます。ソーマを用いると、このように体全体の若返りが起こるとされています。若返りの探求は、このように古い医学体系、インドのアルユルベーダー体系においては、重要な部分となっているのです。たぶん人間は、そういった古代の知恵を参考に、新たな知恵を生みだしていくことでしょう。

特集

絹の話

絹には驚くほどの癒しの力があります。

M. F.さんは胃がんの手術後に、患部に絹布を巻いていると痛みが消え、そんなことは常識はずれなのですが、一年後にはメスの痕のみで、ケロイド状にならずに済み、助かりました。その時の看護師さんが、自分の幼い娘さんに、やけど痕が残っていたので、それを見て、絹の肌を着せていたところ、約半年でやけど痕がほとんど消えたそうです。ケロイドのある方は、ぜひ試していただきたいお話です。

絹布を巻いていると痛みが消えるという話をすると、みんな驚かれますが、痛みが消えるだけではなく、手術痕、種痘痕、やけど痕など、諦めていた傷痕が目立たなくなるのでびっくりします。

戦国時代は、武士が絹を焼いて粉にして持ち歩き、止血に使っていたそうです。殿様は頭が痛むと、絹のはちまきを頭に巻いて頭痛を治めたものだそうです。絹は、そのように優れた効果があることが、昔からわかっていたのですが、科学的に説明のされない時代のことなので、民間療法としてしか知られていなかったのです。

絹には、抗活性酸素作用、つまり抗酸化作用があるのです。現代は認知症が広がっていますが、それは活性酸素を中和する機能が、本来生体に備わっているのに、この中和酵素が中年を

過ぎると、急速に減少することと、毎日の生活環境の中に電化製品があり、そこから発する電磁波のために、人体にもともとある生体抗生物質が壊されることで、認知症が生じると考えられるのです。

がん細胞もまた、体内の抗酸化物質が壊されるために発症してしまうと考えられます。

絹には、生体抗生物質を助ける働きがあるのです。だから、絹の下着やスカーフを身につけたり、絹の布団に寝ることは、健康に非常にいいことです。

平成18年4月から、電気機器の電磁波の問題が大きく話題になって、規制が始まりました。WHOは各国政府に勧告をしていて、イギリスでは成長期の脳に携帯電話はダメージを与えるということから、小学生以下に携帯電話の使用を禁止しています。

現代では、精神異常ともいえる凶悪犯罪の多発現象の影に、農薬のかかった食品や加工食品の害とともに、電磁波の影響があると考えられ、脳を守らないと、これからの生活では大変です。

絹製品は電磁波を吸収してしまい、体内の抗酸化物質の働きを強化してくれると考えられています。そこで日常、絹の肌を着たり、絹の枕、絹の布団で寝ることは、体を守り、健康を守るのに、大変役に立つのです。

絹は何より痛みを消す力が強いので、末期がんの痛みにも絹を使うとよいのです。絹には、腹部深部の痛み、腰痛、歯痛、頭痛、外傷などにも良く、なかなか完治しない腱鞘炎もまた、絹で痛みが消えたなどの例があります。膝の痛

みが消え、水が溜まらなくなったという例もあります。

絹には老化を防ぎ、若返らせる働きがあるといいますが、それは絹を使うことで古傷や種痘痕が薄くなることもわかります。では、なぜこのような働きがあるのでしょうか。脳の神経伝達物質の原材料である芳香族アミノ酸は、実は絹には桁違いに多く含まれており、絹を使うことで脳内伝達物質の働きが良くなり、自然治癒力が高まるからだと考えられています。

乳がんの女性が抗がん剤を使わず、絹をブラジャーの下に挟み続けていて消えてしまったという例も報告されていて、それは遺伝子レベルで考えると、活性酸素によってDNAの水素結合が切れ、その部分に糖が結合することによって傷痕になり、リン酸が結合するとがん遺伝子になると考えられていて、それが絹の抗活性酸素の働きで遺伝子の働きが元に戻って、治癒が行われると考えられるのです。

細胞はもともと常に新しく生まれ変わり、老化の方向には向かっていないのですが、組織の働きが破壊されることで老化が進むのです。それがなければ細胞は甦り、脳の細胞も甦るので。今では、病気も老化も究極的には、活性酸素の作用であることは常識化してきました。絹は、その過剰な活性酸素が組織の破壊作用を起こすのを防止する働きが強いので、老化防止に強力に働くのです。絹は、活性酸素の除去に、非常に有効に働くのです。

絹は着ることもでき、塗ることもでき、食べることもできるのです。だから、食品としても

化粧品としても、もつともつと身近に利用されるべきです。病気になって医療費にお金をかけるよりも、日常の生活の中で絹製品をもつと使って、医療費を抑えるという考え方が大切でしょう。

参考文献・古恵勉さんの資料提供による
『絹が人類を救う』（文芸社）古恵勉著

まゆ製品のお問い合わせ先
(あまのはしだてサロン)
TEL. 0120-22-8830

絹わたふとんについてのお問い合わせ先
株式会社 川島
TEL. 0277-97-2211

トピックス

プラーナ呼吸で生きる

人間には、実は動物形態系と植物形態系の二つの系（システム）が本来備わっているのです。動物と植物とでは、どちらが長生きでしょう。植物の方がはるかに長生きです。神社の神木の中には、何百年、時には何千年も生きている木があります。

実は、人間にはもともと木と同じように天の気と地の気だけを受けとって生きることができ

る植物と同じシステムがあるのです。このシステムを使って生きているのが仙人と呼ばれる人たちです。

動物は動きまわって餌を求め、それを食べて生きる栄養としていますが、木は動きまわらず、一つの場所にいたまま上からは太陽のエネルギーを受け取り、葉緑素が太陽を吸収し、根からは地中の水分と栄養を受け取って、光合成の働きによって生きています。

人間も植物と同じシステムがあるので、それを活かして生きることが学べば、何百年でも生きられる理屈です。

その生き方をするために、まず第一番目に知るべき大切なことは、人間にも光合成をする機能があつて、そのための器官は、脳下垂体と松果体だとされていて、人間の体の中にある気の通り道を目覚めさせ、その通り道にある脳下垂体、松果体を目覚めさせることを学ぶことが大切と知ることです。

人間も植物と同じように、上から太陽のエネルギーを受け取り、下からは地のエネルギーを受け取って生きる気の通り道を作ることを学ばなくてはなりません。人間の体には、中心に上下に通る気の柱（ナディ）というのがあつて、ここに気Ⅱ宇宙エネルギーを流して生きることが学ばなくてはならないのです。毎日大切なのは、この気の柱を作り上げ、そこに上と下から気Ⅱエネルギーを流すことを覚え、そこからエネルギーを栄養として取り入れることです。

ラムサ(著) 川瀬隆弘

ラムサ
真・聖なる預言



深い、
闇に射す
光の
柱が
全てを
照らす
唯、
愛が
語りはじめる

この気の柱は、人間の体にある宇宙エネルギーの取り入れ口、七つのチャクラとつながっています。瞑想によって、気の柱ナディを作り上げ、宇宙のエネルギー、太陽のエネルギー、地のエネルギーを自由に栄養として摂り入れることを毎日実践することが大切です。それでは早速気の柱を作るイメージをし、そこに宇宙エネルギー（プラーナ）を流すイメージ呼吸をしましょう。

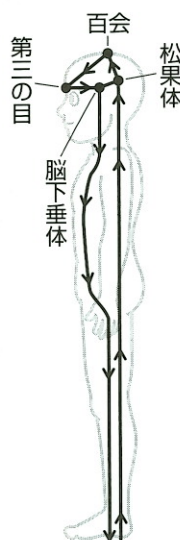
プラーナ呼吸法

まず、大地のエネルギーと言いながら、息を吸い、大地のエネルギーが足の底から尾てい骨を通り、松果体まで気のエネルギー（プラーナ）が昇って行くイメージをしましょう。続いて、吐く息に変え、松果体から頭頂（第三の目）を通して、気のエネルギー（プラーナ）が外に出ていくイメージをしましょう。

今度は、天のエネルギーと言いながら、吸う息に合わせて、天のエネルギーが頭頂から脳下垂体、松果体を通して尾てい骨のところまできて、そこで吐く息に変えて足の底から大地に流れるイメージをしましょう。

次は、太陽のエネルギーと言いながら、吸う息に合わせて第三の目から脳下垂体、松果体を通って尾てい骨までプラーナを下ろし、そこで吐く息に変えて汚れたエネルギーを足の底から大地に流し去りましょう。

このプラーナ呼吸を最低7回繰り返しましょう。



このイメージ呼吸によって、脳下垂体をフルに活動させる方法を学ぶことが重要なのです。

なぜなら、脳下垂体こそ人間が持つ神秘的な能力の根源なのです。人が常識にとらわれないレベルの高い理想を持ち、このようなイメージ呼吸をすると、脳下垂体が活性化して、目覚めます。社会通念にとらわれない、限らない理想を受け取るほど、脳下垂体が目覚め、遺伝子が目覚め、身体は高い振動数を発するようになるのです。そうして、人の体はだんだん光を発するようになります。体が個体の密度から光の密度へと純化していくからです。

脳下垂体をフルに活動させ、社会意識を超えた限らない思考を、脳下垂体が受け取るようにすると人生は変わります。

脳下垂体が目覚めると、脳下垂体から出されるホルモンの流れを使って、脳の眠っている部分を目覚めさせていくことができます。脳下垂

体が開花し始めるにつれて、これまでは可能とは思えなかった形で、人生が新しく展開し始めるのです。脳下垂体が死に向かうホルモン生成をやめ、生のホルモンを生成し始めます。

脳下垂体は、ここから出す内分泌ホルモンで、人間の体を本来いつまでも生きさせ、決して老いることがないようにする力を持っているのです。

身体細胞は、そのように本来プログラムされていて、人間の身体は、内蔵などの働きではなく、脳下垂体からの分泌腺の滋養、つまりホルモンだけでビタミン、ミネラルなどの心配なく、何百年、何千年と生きられるように作られているのです。

神々の食べ物

聖なる栄養とは何か
ジャズムヒーン著
ラムサ著



参考文献

『神々の食べ物』ジャズムヒーン著／ナチュラ
ルスピリット／2,920円(税込)

『ラムサー真・聖なる預言』ラムサ著／角川春
樹事務所／1,600円(税込)

健康情報1

ほとんど食べずに生きる人

私たちは、成人男子なら一日に2500キロカロリー、女性なら2000キロカロリーを摂取しないと健康は維持できないというカロリー神話を信じています。ところが、実際は一日500キロカロリーで、健康に生きられるのです。『ほとんど食べずに生きる人』(365日の検証記録)の著者柴田年彦さんは、身を持ってその実験をしました。

実験を始める前の柴田さんは、身長173センチで、体重は104キロでしたが、2007年5月末から実験を開始し、今では57キロです。実験を始めると、体調はどんどん良くなり、体質が強化され、痩せることで不健康になるどころか、逆に全身の細胞が甦り、人生が充実したといわれます。

1か月目は、貧血症状が出たそうです。ゲップと貧血症状があり、好転のためのマイナスの反応が出てくるのです。2か月目は、一日中眠かったそうです。角砂糖を一粒なめると、一瞬に症状は改善されますが、また頭がきりきりと痛くなります。バナナを食べてみると、大丈夫だったそうです。これは、糖類の種類による違いです。白砂糖は単糖類、バナナや果物や二糖類。メープルシロップや米飴は多糖類です。単糖類は成分が単純なので、即効性はあるけれども、体に対して激しい変化を与えて副作用が出やすいのです。二糖類や多糖類では、構成が複雑で、穏やかに消化吸収さ

れるので体にやさしいのです。

この期間に福祉保健センターで基本健康診査を受けましたが、異常がありませんでした。

3か月目に入ると、それまでの症状が変わって声がかすれ始めました。やがて声がかすれるとともに脱力感が現れ始めました。記憶力が衰え、日常的に使っている漢字が書けなくなりました。その状態が6か月目まで続きました。少食にしているので、おなかが減ってどうしようもない時には、ちよつと甘いもの、メープルシロップや米飴などの多糖類を口にとすると、すぐにおなかが満足した感じになる。そうして空腹感をしのぎました。

4か月目、皮膚に不快な症状が始めました。両足かかとにあかぎれが出たり、歯が浮いたような感じと、奥歯の痛みが続きました。ところが、手の甲に出ていた湿疹は、2週間ほどで突然消えてなくなりました。両足のかかとのあかぎれも2週間くらいで消え、どうやら深い層から毒素が出ていく感じがしました。

このような好転反応が、約6か月続きました。体質の変化を意識できたのは、6か月前くらいからです。夏に寒気を感じて、この調子で秋や冬がきたらどうなるだろうと心配していたのに、寒さに強くなりました。2か月目には一日中眠かったのに、睡眠時間が4時間でも十分と感じられるようになり、疲労感が残らず、体力が付きましました。ひどかった物忘れや漢字忘れも、ある日を境に解消し、脳が活性化し、回転が速くなり、直観が働くようになりました。肌のキメが細くなり、やる気が満ちてくる感じがしました。

ウォーキングは6か月目から本格的に始めま

した。体重が重たい時のウォーキングは、体に負担になりますが、体重が減ってからのウォーキングは楽なのです。



食事は、初めは少食レベル（800～900キロカロリー）でしたが、7か月目後半からは微食レベル（400～500キロカロリー）に減らししました。このころになると、目に見えて大小の症状が改善されました。30年来の爪の白癬菌が消えたり、老人性乾皮症が治つたり、坂道を昇る時の痛みが消えたり、椅子に1、2時間座っていると出ていた腰痛がまったくなくなつたり、一時間に一回というひん尿が2、3時間に一回に減りました。白髪が減り、髪の毛全体が黒くなりました。風呂場で水をかぶつても大丈夫水風呂に入っても平気になりました。

体重の増減には、不思議な現象を体験しました。200グラムを確認して食べたのに、1時間後に体重を測ると、500グラム増え、2時間後に測ると、さらに1000グラム増えているのです。3時間後には、そこから200グラム減りました。どう考えても食べたものと重さの増減が合わないのです。

柴田さんは、このように正確な記録を残し、自分の五感で確認しながら微食作戦を実行していたのです。食事は玄米がいちばん良いことを確認されました。加工食品、添加物が増えられたものは摂らず、ほとんどのサプリメントも摂られませんでした。

柴田さんにならって実行に踏み切りたい方に、柴田さんは毎日の変化を克明に記録しながら微食作戦を実行されることをすすめておられます。

健康情報 2

ホメオパシーの話

ホメオパシーは、自然界に存在する植物、動物、鉱物などの物質と、水の記憶力を利用した治療法だといわれます。18世紀にヨーロッパで生まれ、現在ドイツでは25%以上、オランダでは45%、インドでは55%、フランスでは50%の医師がこの代替療法を行っています。日本では、まだほとんど知られていませんが、WHOのデータでは、世界で最も広く用いられている初期医療の一位は漢方薬、二位はこのホメオパシー、三位はハーブ、そして四位が化学製剤ということです。

欧米の医学学校では、代替医療をカリキュラムに組み込むのが当たり前になっていて、アメリカ国立衛生研究所は、1992年に200万ドルの予算を組んで、代替医療局を開設したほどです。2002年度には、1億ドルを超える予算を計上しています。

ホメオパシーは、体、心、魂という人間のすべての面を対象にすることができると治療法だといわれます。ホメオパシーとは、一体どんな治療法でしょう。

ホメオパシーは、1796年、ドイツの医師ハーネマンによって考え出されました。そのころは、大変野蛮な治療が行われていて、その代表格は瀉血（しゃけつ）でした。あらゆる病気は悪い血液から生じるものであり、悪い血液を抜けばよいという考え方から、医師たちは、倒れた患者の静脈を切って、血を抜いたものなのです。もう一つは、腸内の浄化を目的とする塩化第一水銀を下剤として用いる方法でした。

アメリカの初代大統領ジョージ・ワシントンは、退任後の1799年、激しい喉の痛みを訴えました。腫れた喉が呼吸を妨げるようになり、そこで当時としては最高の瀉血と塩化第一水銀をとる治療がなされたのです。まず、1パイント（0.47リットル）の瀉血が行われ、喉の焼灼が試みられました。でも、容態は良くなりません。さらに1パイント、続いて2パイント以上もの血液が搾り取られ、合計2リットルほどの血を失い、塩化第一水銀を下剤とし、そのため重篤な脱水状態におかれ、ワシントンはその日のうちに死亡してしまいました。

その少し前の1771年に36歳の若さでこの世を去ったモーツァルトも、長い間ある種の熱病で寝込んでいましたが、直接の死因は瀉血であったという説があります。

ハーネマンは、このような危険な療法に疑いを持ち、薬の正体や効果を一つひとつ徹底的に

調べ上げ、最小限の薬だけで患者の苦しみを和らげることができると考え、自らを実験台にして、新たな治療法に挑戦し始めたのです。

ある時、彼はマリアの治療のために処方されるキナ皮を自分で服用してみました。すると、急な震えとだるさ、頻脈、発熱というマリア同様の症状に襲われました。そこで、「キナという一つのものが、マリアを治したり、健康な人間に対して同じ症状を引き起こしたり、正反対の働きをするのはどういうことか」と疑問を持ったのです。

そして、繰り返し実験を行い、一つの結論を導き出しました。それは、「健康な人間にある症状をもたらす物質は、その症状が出ている病人を治すのではないか」というものでした。この考えは、今では「類似の法則」と呼ばれ、ホメオパシー療法の根本原理とされています。

「類は類を治す」という考え方です。ワクチンの考え方は、この考えに基づきます。

ハーネマンは、そうしていろいろな薬剤を見つけていきました。そしてその成果を「マテリア・メデイカ」という薬効書にまとめました。

ハーネマンはこの治療法をすると、患者には大きく見て二段階の反応が起こることを知りました。

第一段階は、症状の悪化として現われ、第二段階は症状の鎮静化と消失という二次反応として現われます。ハーネマンは、この初期反応をもつて患者が受けるダメージを極力減らしたいと考え、投薬量を減らして初期反応の強さと二次反応の強さを調べていったのです。ハーネマ

ンは薬の原液を水で薄め、実験を行っていました。そして、経験から液をよく振った方が効き目が強くなることを知ったのです。そこで、薬を薄めては激しく振るという作業を何度も繰り返して、薬を作っていました。

すると、意外なことを発見しました。薬を少なくし、薄くするほど効果が強まっていくという常識では考えにくい事実がわかったのです。ただ薄めれば良いというのではなく、段階的な希釈と振盪が必要条件でした。つまり、次のようにすることです。薬の原液を1とし、水またはアルコール水を99の割合で混ぜ、その液を激しく振ります。

こうして出来上がった100分の1の希釈水を「1C」のホメオパシー原液と呼びます。これをさらに100分の1に薄めて振ると、「2C」のホメオパシー液ができます。この作業を繰り返して、薄めていくと、どんどん薄い薬ができます。これをホメオパシーの第二の法則「微量の法則」としました。

人々は、「そんな微量では効くと思えない」と疑いました。けれども、事実ホメオパシー療法はすばらしい成果を生んでいたのです。ホメオパシーでは、30Cがよく使われる希釈度数です。

一般の人の心をとらえたこの療法は、懐疑派の医師たちにとっては攻撃の材料でした。医師の中には、「エリー湖に母液を一滴たらせば、ホメオパシーの薬になるだろう」と皮肉りました。すると、推進派の医師たちは、「もちろんさ。ただし「湖を60回激しく振ることができれば

ね」とやり返しました。

1813年、ドイツのライプツィヒで、チフスが流行したことがありました。通常の治療を受けた患者の死亡率は30%以上でしたが、ホメオパシーで治療した180人のうち、死亡したのはわずか2人(1.1%)でした。

19世紀中ごろにヨーロッパとアメリカで吹き荒れたコレラの大流行でも、大都市の正統医学の病院では、1104人の患者のうち、573人(51.9%)が死亡し、ロンドンのホメオパシー病院で手当てを受けた61人のうち、死亡したのは10人(16.3%)でした。

1892年ハンブルグで流行した時は、正統医学の死亡率は42%、ホメオパシーの死亡率は15.5%でした。ホメオパシーは、高熱病や猩紅熱、ジフテリアなど、他の伝染病でも威力を発揮しました。

ホメオパシーで小児てんかんを治した例を紹介しましょう。8歳の女の子が突然てんかん症状を起こし、白目をむいて手足を激しく痙攣させました。そんなことは、これまでにただの一度もなく、母親はパニックになりました。病院で抗てんかん剤の投薬治療を受けましたが、なかなか良くなりません。薬を飲んでいても、発作が起きることがあるので、少しも安心してはいられません。3年後、母親はホメオパシーを学び、セッションを受けました。そうして処方されたレメデイは、プルサテイーラ(セイヨウオキナグサ)の200Cが3粒でした。母親がプルサテイーラを飲みこませた白い砂糖粒を毎日1粒ずつ娘に与えました。ボトルの中のほんの

り甘い砂糖粒がすっかりなくなったところには、発作はなくなり、以後一度もてんかんは起きなくなりました。

家庭でホメオパシーの治療をするには、「基本キット」「女性用キット」「子ども用キット」などが用意されています。家庭で専門家でなくても使えるように組み込まれたセットで、いずれも30Cや12C、6Cなどの低い希釈度数のレメデイが10種類〜30種類くらい入っています。発熱や咳、風邪、腹痛、下痢、便秘、痔、切り傷、打ち身、捻挫、火傷、精神的ショックや不安、悲しみ、情緒不安定など、日常的に負いやすい病気や障がい、ファーストエイドに利用されるレメデイが取りそろえられているのです。

初心者がレメデイを選ぶには、簡易版の「レパートリー」と「マテリア・メディカ」が必要です。これらは、レメデイのキットを購入する時に合わせて入手することができます。



出典：『見える医師たち ホメオパシー』伴梨香著／新潮社／1,260円(税込)

良書推薦コーナー

『EM・Xが生命を救う』田中茂著
／サンマーク出版／1,680円(税込)

著者の田中茂さんは、かつて和光市長を務め、医学博士です。自分の病院で患者にEM・Xをすすめ、そのすばらしい効果を見て、EM・Xこそ世界最高の抗酸化物質とさえ評しておられます。人はなぜ病気をするのでしょう。それは遺伝子に異常をきたすからです。では、何が原因で遺伝子は異常をきたすのでしょうか。食生活、ストレス、不摂生、化学物質など、山ほどの原因がありますが、すべてに共通するのは、活性酸素です。活性酸素がすべての病気の根本の原因なのです。

その活性酸素の害を消し、中和する毒消しのような働きをする掃除屋(スカベンジャー)という抗酸化物質です。そしてあらゆる抗酸化物質の中で、EM・Xは副作用がなく、最高のスカベンジャーだと著者は言われるのです。EM・Xは、いちばんよく抗酸化物質として働くビタミンEの数百倍の能力を持つとさえ言っておられます。

というのも、ご自分の病院で、末期の肺がんで余命3か月と言われたY.M.さんが、EM・X 70ccを一日に3回飲むようにと指導して、二週間後にCTスキャンを撮ってみたところ、肺の影が消えていたのです。

末期のすい臓がんで余命1、2か月と言われた患者さんに、食事ごとに80ccを一日に3回摂るように指示したところ好転し、半年後には一回あたり70ccに量を減らしてよいほど病状が

回復、朝食前に草むしりをしたり、家族旅行に出かけたり、大手術を受けた人とは思えないほど元気になったそうです。

EM-Xは微生物の培養液で、微生物は入っていないのです。微生物が作り出した抗酸化物質を取り出して濃縮したもので、薬ではありません。清涼飲料水で用法、容量に規制はないのです。

がんだけではありません。糖尿病や膠原病、ぜんそくなど、ありとあらゆる病気に卓越した効果があります。長期にわたって肝硬変を患っている患者の肝機能の数値が正常化し、黒ずんでいた肌が透き通った肌になるなど、EM-Xは免疫力を高め、すべての難病に効くと著者は言っております。

食事のたびにEM-Xを飲めばよいのです。ビタミンC、ビタミンE、フラボノイドなど、すぐれた抗酸化物質として知られていますが、がんに侵されるととても間に合いません。なのに、EM-Xは効果があるのです。EM-Xを飲むと、風邪をひかなくなったり、髪の毛が黒くなったり、体全体が若返ります。

90代のおばあちゃんの痴呆の兆候が消え、脳細胞が40代と見まがうほどきれいな細胞になったなど、健康にも若返りのためにも、EM-Xは最高の飲料だと著者は書いておられます。健康な人は、一日30ccのEM-Xを必ず飲めばよいとされています。

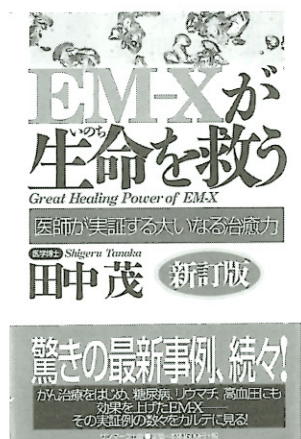
EM-Xは清涼飲料水ですが、少し高価で500ccが10本で4万5千円です。健康な人は、一日3回、一回わずか10ccでいいので、長持ちします。

1、2か月の使用で効果が見えないと止めてしまふ人がいますが、続けることが大切です。続けると、見えないところで驚くほど細胞を若返らせていくのですから。EM-Xの抗酸化作用は、数多くの抗酸化物質と比べて、その力がけた外れに強いのです。がんを攻撃するNK細胞が見えないところで活発に働きだしています。白血病にも驚くほどよく効くといわれます。

EM-Xが高価すぎるという場合は、EM蘇生海塩を使うとよいのです。EM蘇生海塩には、便秘を良くする力もあり、抗がん剤の副作用を減らす力もあります。こちらだと3か月で1000円程度で済みます。EM-Xより、EM1号がよく効くと言われます。こちらは腸内環境を変えて、腸内の善玉菌を優勢にする力があるからです。

EM-Xがよく効くのは、抗酸化力が他の抗酸化物質よりはるかに強力だからです。抗酸化力を強めれば、想像以上の再生力、回復力を高めることができるのです。生体の蘇生力をそんなに高めるものは、かつてありませんでした。EM-Xは、末期がんさえも消す抗酸化力を持つ抗酸化物質なのです。

著者はこの本の最後に、「EM-Xは未来の医療を根本から変える可能性を秘めていると思われる。今後もEM-Xと深くかわり、医療の発展に少しでも貢献したいと思います。」と述べておられます。



EM-Xについての連絡先

EM-X予防医学研究所(所長 田中茂)

〒351-0114 埼玉県和光市本町1-1-1

ドレイク和光本町1階

TEL 0120-248607

FAX 048-461-2288

編集後記

新しい年が始まりました。時代がどんどん移り変わっています。それにともなって、常識もどんどん変わっていかなくてはならないでしょう。にもかかわらず、普通は勉強が追いつかず、新しい時代に合わない考え方をしている、時代に取り残されてしまいがちです。昔の変化は緩やかでよかったのに、今は速すぎて知らないでいることがいっぱいあります。人生で大切なことは何でしょう。健康に生き、人の役に立つ生き方をする事ではないでしょうか。今年もそのための勉強を続けて参りましょう。

【発行人】

七田 眞

【発行所】

「200歳まで生きる会」

〒695-0011

島根県江津市江津町527-5

☎0855-5215301

FAX 0855-5215797